

アカマツ林整備の今と未来

—「景観生態学」の視点から—

松雪 清人

私たちの活動の場であるアカマツ林に一般の人を連れていった時、「アカマツ林とは思えない」という言葉をよく聞きます。これは、アカマツ群落としての景観になっていないということなのだろうと思いますが、ここで言う景観とは基本的には植生によって表現される姿です。

この景観という言葉は、ふつう風景と同じ意味で用いられることが多いですが、この景観を生態学的に分析する方法として「景観生態学」という手法があります。即ち、私たちの目に見える自然景観はたまたまできたものでなく、地形・地質・気候・土壌・日照などの自然条件(これらを立地と呼びます)、さらにはそこに人的作用が加わって植生等による景観が形成されるという考え方です。

具体的には、「まず地殻を基盤として地表面の起伏(地形)があり、その上に風化物質や土壌が載ってくる。さらにその起伏に応じて水の状態(地表水や地下水)や土壌水分の多寡が決められ、そしてそれらの諸条件を反映した形で植生が成立する。」という考え方で、立地の性質(人為的作用を含む)と植生を合わせた複合体として把握しようとする方法です。

この考え方に従えば、私たちの目に見える自然景観にはそれができた必然性があり、逆に言えばその立地環境にそぐわない植生景観は形成されないということになります。我が国で昔から言われる、「尾根マツ、谷スギ、中ヒノキ」という植林方法もこれに近い考え方だと思います。

この視点で今のアカマツ林を見た場合、全体的な景観としては九州という立地環境に最も合致した「照葉樹林」になりつつあると言えます。ただ、今から40年以上前までは、アカマツを利用するために人の手による皆伐が行われていたため、アカマツの生育に適した立地環境が尾根部を中心に保たれ、アカマツ群落としての更新が繰り返し行わ

れてきました。

ここで、私たちの活動の場であるアカマツ林の立地環境(自然条件)を少し細かく見てみたいと思います。油山周辺には花崗岩類が広く分布していますが、この花崗岩類は風化すると水を通しやすい砂(マサ)になり、しかも割れ目に沿って地下深くまで風化しやすいという性質を持っています。その結果、降った雨は地中深くまで浸透し、乾燥した砂よりなる尾根が形作られます。一方で、もともとは堅い岩盤ですので、山腹では表層の土壌が堆積しにくい急峻な斜面が形成されます。そしてこれに、良好な日照条件が加われれば、乾燥地に強いアカマツ等の植物がまず育ってきます。

当然この環境は、人の手が加わらなければ「植生遷移」という自然の流れの中で、照葉樹林に適した環境へといずれ変わっていきます。まさに、今我々が見る事ができるアカマツ林は、照葉樹林に変わりつつある姿だと言えます。

私たちは今、現在残っているアカマツ成木の保護を行うとともに、実生幼木によるアカマツ群落としての更新を目指して整備を行いつつあります。そこで考えなければいけないことは、木を守り、育てる事だけでなく、照葉樹林に適した立地環境になりつつある場を、アカマツ群落に適した環境に再び戻すことではないかと思っています。即ち、落ち葉や腐葉土などを除去する地掻きや、地面に届く日照を遮る広葉樹の除間伐によって、アカマツ群落の生育に適した環境(場)を人為的に復元することができれば、その後は自然の営みによってアカマツやその環境に適した林床植生や下層植生が増えていくのではと期待しています。

私たちの微々たる力でどこまでできるか自信はありませんが、考えうることをいろいろやってみて、最後は自然の力に任せるという方向で進んでいきたいと思っています。

